



八木 明恵 新連載

私が初めて KISWEC に足を運んだのは 1999 年、社会福祉士養成課程の学生だった頃。家族療法のワークショップで団先生の実践に触れました。あれから四半世紀。滋賀で約 20 年、福祉現場と子育てにまみれる日々を過ごしてきました。

数年前、団先生の Facebook をきっかけにぼむ漫画展へ通うようになり、そこで将来の迷いをぼつぼつと相談するようになりました。定年を待つのか、それとも今動くのか。正解がわからないまま揺れていた時期でした。背中を強く押されたというより、さりげなく「やってみたら」と言っていた感覚が残っています。

2025 年 3 月に退職し、1 年。屋号を掲げ、ようやく歩き始めました。何ができるのかはまだ手探りです。ただ、自分の人生の舵を自分で握っている感覚だけは確かです。かつて憧れていた本誌で執筆の機会をいただき、心より感謝しています。

思考の補助線
P286~

田中 千晶

令和 8 年、ずっとやってみたくていたかぎ針編みに手を出しました。何かを始めると没頭してしまうタイプなので、とりあえず、「修論を提出してから！」と決めていたのです。

最近 SNS で編み図だけでなく編み方動画もあるので、やってみたくて！これならできそう！と見ているだけでワクワク。しかし、自分は左利き…！世に出ている動画はほとんど右利き用…。初手から詰みました。

しかし、さすが現代。検索すれば左利きの編み方動画や左利き用の教本が出てくる。夜な夜な動画を見ながら毛糸と格闘しております。

森で出会えば…
P280~

本林 友梨

対人援助マガジンの執筆がいつもぎりぎりにならないと取り掛かることができず…そのたびに「次は早めにやろう！」と強く思うのに実行できず。次回こそは早めにやりたい…！！

心理臨床における多重関係を考える
P274~

土元 哲平

地球の絵を描き始めました。絵は下手なのですが、作品のコンセプトや詩と並置される表現として完成度を上げていければと思いつつ、色々な芸術家に学びつつ、子どもと一緒に描いています。宇宙×芸術についてもこれから少しずつ書いていければと思っています。

地球と宇宙の文化心理学
P282~

馬渡 徳子

石川県の今年の冬は、一月中旬から二か月間、近年にない豪雪となりました。被災地である奥能登地区も三度の 30~60 センチの積雪となりました。更地が増えたので日頃動かしている車の下に、居場所を失っていった猫ちゃんが隠れていることもあり、発車するときには留意が必要だそうです。県内全域では、例年になく交通事故も多発しました。我が町内は一日で 60 センチを超える積雪のために、公助としての除雪車は間に合わず、町会で契約した除雪車も一日中走ってくださいましたが、夕方になってなかなか順番が来ません。

高齢化が進んでいる班の除雪作業は、私たち青壮年世代が進めることとなりました。

こんな嬉しいことがありました。連れ合いが当直明けで不在の日曜日、早朝から除雪作業をしていると、直ぐ近所の中学生になった子どもたちが、「おばちゃん、〇〇さんは去年家族が亡くなられて一人でおいでるし、▽▽さんはおじちゃんが病気でみたくて車を運転していないみたい。このあたりの五軒分、一緒に雪かき手伝わせてね。」と声をかけてくれました。

「よく、ご近所のこと知ってるね。」
「うん。単身赴任している父が防災士やろ。ほやし、雪のニュースを観て、『馬渡さんにご近所の雪かきをしてあげてね』とメールしてきたよ。」

「そうかあ。それはありがとうね。助かるわ。じゃあ、お母さんと一緒に四人で頑張ろう。」

それから二時間以上かけて五軒分の雪かきが終わり、緊急車両も通れる状況になりました。

中学生になった彼らのたくましい姿を観て、乳幼児の時から交流があったので、その成長ぶりに胸が熱くなりました。

「おばちゃん、また雪で遊ぼうね」
「うまいこと言うね。確かに雪と戯れていると思うと、なかなかおもしろいね。」

やれやれと、当直明け後に睡眠をとっていた連れ合いと夕飯を食べ終わったところに町内契約の除雪車が来て、ゴーと雪の塊を置いていき、がっくり。このままでは翌朝に車は出せないし、体の不自由な方は玄関先から出られません。緊急車両も搬送に手間取ります。もう一度 30 分あまり、中学生たちと雪の重い塊を避ける作業をしていました。そんなところに、ふるさとの山口県からみかん箱が到着し、お手柄の彼らにお裾分けができました。ニュースを観て案じてくれた弟の心遣いにも感謝。



さて、我が家の庭には、亡義父が好きだ

った寒椿があります。三番目の子どもが生まれたときに同居し、その記念にと植えてくださいました。成長した寒椿が、しんとんと無音で降り続く積雪の重みに耐えている姿を観ていて、「ああ、自然の厳しさに向き合い、春を待つ辛抱強い北陸の方々のお人柄のようだな」と思い、俳句を詠みました。

しんと
頭を垂れし
寒椿

馬渡の眼
P137

山岸 若菜

前職場を12月末で退職しましたが、その後も非常勤で実習だけ手伝いに行っていました。

非常勤になると責任が軽くなるからいいかなと思っていましたが、実習となると教員は1人しかいないので責任感にあまり変わりなく、やっぱりやめとけばよかったと後悔しながらも、始まってしまえば必ず終わりがあると言いつつも、何とか大きな事件事故もなく終わりました。

あーよかった。

さてこれから1ヶ月はゆっくりしようと思うのですが、「ゆっくり」ってどうやってするんでしょう？？だらだらしたらいいねんと言われますが、だらだらってけっこう難しい。お散歩に行ったりすればよいのでしょうか？

ともかく何時にどこかへ行かなくてはいけないというのがないだけでも十分だらだらだと思うので、あまり深く考えず毎日過ごしてみようと思います。

ある訪問看護師のあたまの中
P261～

乾 京子

2026年の年明けから、「いったいこれ、どういうこと！！なんでこんなことになるの？」という事が続出。頭が付いていかない。ゆっくり考えて…とと思っているうちに次々といろんなことが、かなりのスピード

で起こっては流れて行く。他所のことと思っていたら、わが国でも自分の都合で通常国会初日に解散したり、あれよあれよという間に、景色が変わっていく。私の頭が固くなった。そうそう身体も固くなってきて、あちこち痛い！！疲れがとれない。集中力が切れる・・・ああ、なんだかなあ。気分転換の湖岸散歩に行く日が増えてきた。変わらないようできて、日々同じことはない。けれど、いつものように琵琶湖の奥にはいつもの比叡山が、比良山が、そして真っ白の伊吹の山、鈴鹿の山々がデンと腰を据えて、そこにある。それらを眺めながら、ナンキンハゼの上にとまるトビや群れて飛ぶスズメやムクドリ、チョンチョンと目の前を跳んでいくセグロセキレイなどを見て、ほっとしている。しばし、心のざわざわを沈めては夕日を見ながら、家路へと急ぐ。そんな日々を過ごしている。

じゃりんこ文庫
P270～

中谷 陽輔

年が明け、あれよあれよと年度末。

・・・この間、小2の息子の自転車が2年ぶりに新しくなったり。そんな息子がこの冬初めてスキー教室にチャレンジしてみたり。かたや小3になると学校附設の学童からいられなくなって遠い学童になり、その送迎をどうするか夫婦で考えたり。そして年少の娘が、兄も通っているスイミングを羨ましがり通い始めてみたり。なぜかすでに鉄棒で10回連続後ろ回りができる運動神経よさげな娘は、年長から始めた兄を追いつく勢いだったり。いろんなことがあったりしました。

昨年末から我が家で恒例になっている就寝前のプチゲーム大会。息子はモノポリー(ジュニア版)にはまって毎日のようにやりがるけど、20～30分ほどかかってしまうのが悩みどころ。いつもより早く就寝の準備ができるかどうか。子どもも大人も、みんなで楽しむための「余裕」をいかに日々もてるか。その重要性和難しさを考えているように感じます。

私自身、この年度替わりにおいて、職場の立場は変わらないながら、周囲の職員や体制に結構いろいろと変化があり、それらに対応する自分がどれだけ・どこま

で「変化」する必要があるのか、そしてその中でどれだけ「余裕」や自分のやりたいことをやれる状況を作れるか考え、動く日々です。

子どもは確実に成長している中、大人側が「余裕」をなくし、忙殺されているとうっかり貴重な「変化」を見逃してしまいそうになります。私自身、原稿に書いたような方法で、なんとかバランスを取りながら、引き続きコソダテにおける「変化」と「余裕」に向き合っていきたいと思っている今日この頃です。

コソダテノシンリ
P240～

団 士郎

まずは半年！と決めて、11月から久々に舞台を観に出かけている。日常の行動選択がどうしてもパターン化してしまうことに変化をと考えたのが理由。そこで大昔足繁く通った観劇を復活させたのだ。



きっかけはこのサブスク。安くはない会費を毎月納め、チケット情報が月に二回届く。その中から興味のあるものを月一本ペースで選択して出かける。

映画と比べ日時が限定されるし、劇場も大阪が多い。それでも足を運ぶのは、非日常感が今のところ確保されているからだ。

あれこれ沢山のことをしてきたせいだろうか近年、何をやっても新鮮味がない。実は舞台もそうなのだが、今の客席と自分の違和感がちょっと面白い。この作品の何が面白いのか？とジェネレーションギャップも楽しんでいるのかもしれない。『推し』のある人たちの拍手どころも違和感だ。だからといって、自分の方が正しいなど思っているわけではない。

時々魅力的な舞台にも会うので、まあそれでいいかと思いつつ、せっせと大阪の劇場に通っている。

晩年D・A・N通信
P38～

内田 一樹

ここ最近「物語」の持つ力の大きさに畏怖を感じています。大きな力、可能性を持っているからこそ「物語」に希望を感じていたけれど、だからこそ自分自身もまた大きな「物語」の一部として回収されていきかねない。そんなことを感じながら、それでも「物語」が好きな自分でいられますように、と思っています。

社会科の授業を 対人援助学の視点から P250~

宮井 研治

「そろそろ、やらねば」と、男はつぶやいて、やおら重い腰をあげた.....なんて、小説の書き出しのようでしょ。つぶやいたのは私で、小説ではなく、どちらかと言えばノンフィクションです。第54号の対人援助学マガジン、私にとっては2回目の号の執筆者短信に、「焚き火、孫、ときどきサーフィン」というテーマで書かせてもらいました。覚えておられる読者の方は、おられないでしょう。それでよいのです。このテーマは、自分の今後のやってみたいこと、大袈裟に言えば、人生終盤のメインテーマとして、書き記させていただいたものです。などと、大上段に構えるほどのテーマではありませんが、何処かの政党のように選挙前の公約を、すっかり反故にするような行いは断じてしない(選挙演説みたいになってしまいました)。チカラが入ってしまいましたが、その後の進捗状況を書いておきます。



「焚き火」、これについては、コロナ禍からスタートしたソロキャンプ、それ以前からの仲間とおっさんキャンプを年 2、3回は続けております。また、「孫」ですが、これは関わる努力ではなく、向こう(孫ではなく、孫の母親、つまり私の娘)からの要請を受け、出かけたり、私の家に来たりしております。今では、彼の下に彼女(妹)が誕生し、賑やかさを乗り越えて、カオス化する

場面もありますが、楽しんで過ごしております。以上の短信にてチラホラ報告もさせてもらってきました。

そして、残る「ときどきサーフィン」ですが、実態は「ちっともサーフィン」です。しかし、ついにこれについても着手しようと、つぶやいたのが滑り出しの「そろそろ、やらねば」の私の言葉です。持つべき者は、友の友、つまり知り合い。キャンプ仲間の友人に、「サーファー、ときどき公務員」怒られますね、訂正「サーファー、いつもは公務員」という方がおられて、この人の馴染みのスポットへのサマーサーフトリップを計画しているところなんです。そして、そのための体力向上、身体作り、安全の担保のためにジム通いを再開したのです。エクササイズスタジオに入って、追い込みをかけた後には、死にそうになりながらも続けています。そう、海で死なないためにね。「海をなめちゃいけません」これは、公務員サーファーのお言葉です。続報は、またの機会に！

人生は対応のヴァリエーション P265~

櫻井 育子

いつの間にか 2026 年になっていたという感じ。年明けはフランス視察で、帰ってからも個展のためにずっと頭の中はフランス三昧。クロワッサンが美味しすぎたので、帰ってからも美味しいクロワッサンを求めてしまう。人生の中で、それくらい何か「かぶれる」ということも少なかったもので、自分がちょっと面白い。そして、フランスに行くのと引き換えに、長年乗っていた愛車のカンゲーが壊れ、廃車になった。愛していただけに、心が痛んだ。今は車なし生活を楽しむことに決めた。不便さはあるが、わたしの周辺環境(家族環境)にもまた変化があり、なんとかなるようになっている。しばらくは、運転手付きの生活ができる喜びを享受しようと思う。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

現象学としての書道

P238~

鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に軽い脳梗塞で入院し、それを機に翌2025年令和7年3月で園長職を退き、現在は法人の理事長として、週に3日職場に顔を出すという生活をしています。だから、週のうち4日は、家に居て家事見習い中です。メモを持つての買い物も、だんだん板についてきたような気がしています。商品によっては、「底値」も分かるようになりました。

そんな生活をしばらく続けてみると、子どもたちに関わることがほとんどありません。つまり、児童心理治療施設の方からも児童発達センターの方からもさっぱりお呼びがかかりません。それは、どちらもそれなりに順調に運営されているからなのですが、私としてはいかに手持無沙汰で、独り言のネタも見つかりません。

ということで方向を少し変えて、学生時代に始まり現在もお関り続けている『カウンセリング』ということに関連して、父親のことや青森カウンセリング研究会のこと、「ロジャーズと友田不二男」や「ジェンドリンと友田不二男」、「カウンセリングとフォーカシング」などのテーマで、思いつくままに書き残していこうかと思えます。

月一のペースで開催している「フォーカシングの会」と、同じくらいのペースでウェブで開催している「(カウンセリング関係の)文献を読む会」への参加が楽しみです。

もしかした、また学園の子どもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、その時はそれなりのカモフラージュを施しています。

理事長の独り言

P235~

畑中 美穂

誘われて久しぶりに知人に会い、20年ほどご無沙汰だった友人と電話で話し、近々オンラインの研修で知り合った数人と初めてリアルで会う。日ごろの人間関係以外で立て続けにこのようなことがあると、何か「動いているなあ」と感じる。

この春にはひとつ区切りになるコトもあっ

て、その「終わり」と「はじまり」の境目の今。大切な人たちと話し、新鮮な想いで空気を吸い込むように、英気を養う、というのか。「ふさわしいなあ」という気がする。ありがたいことだなあと思う。

一語一絵
P 2 1 3 ~

渡辺 修宏

ちょっと体調不良になって、しばらく気の抜けた生活をしていたら、あっという間に史上最大体重になってしまった。そしたらなかなか痩せない。そのうち、子どもと妻が、デブ3号と名付けてくれた。3号ってなんだ？と思ったら、子どもも妻も、最近太つたらしい。さて、誰が最初にこのニックネームを返すものやら……

対人援助実践をレポートする
この一冊
P 2 1 6 ~

玉村 文

今年度は、未就学児3人を保育園に送り迎えする一年でした。月曜日と金曜日はお昼寝用布団を3人分抱えての登園。両手いっぱいの大荷物で歩く姿は、我ながら少し同情を誘っていたかもしれません。

そんな日々も、いよいよ終わりが見えてきました。4月からは長男が小学校に入学します。体験入学と一緒に出かけたり、学校指定の用品をそろえたりと、少しずつ準備を進めているところです。小学生になれば登校班で自分の足で通うことになります。今年のように3人そろって送迎する日々を、ふと懐かしく思う日が来るのかもしれない——そんな気持ちも芽生えています。



ところで、小学校は4月1日から通えるわけではないのです。入学式までの期間や給食が始まるまでの約20日間はお弁当持参とのこと。さっそく「小1の壁」の気配を感じつつ、4月をどう乗り切るか、今から作戦を練り始めています。

応援 母ちゃん！

P 1 9 9 ~

杉江 太郎

家庭福祉領域で働く杉江と言います。この前、AIで「対人援助学マガジン、杉江、評判」と質問を試みたら、誰が行っているのか！？と思えるくらい肯定的な返答を頂きました。とは言え、まあそんなに読者がいるわけでもなく、AIが肯定的な文章を考えただけだと腑に落ちなかったので、今度は逆に「対人援助学マガジン、杉江、悪い評判」と聞いてみました。すると、AIからは、「エビデンスに欠け、楽観的だと批判が多い」との返答があり、どちらかと言えばこちらの方が、自分の感覚にもしっくりくるなと思った次第です。そもそもエビデンスに関心がありませんので、それに欠けていることは自覚をしていますし、楽観的という評価はむしろ褒め言葉だと思っている自分がいます。最近、面接の中で、「AIに聞いたら……と言っていました」と聞くことがあります。AIの返答に一喜一憂せず、適度な距離を持ちながら付き合っていきたいと思っています。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P 1 8 9 ~

米津 達也

原稿を仕上げた日は、1年に1回の健康診断の日だった。ここ数年、メタボ云々といわれてきたが、体重、腹囲共に大幅減少。日々の結果だと思うが、あまりそこに興味もない。ただ、最近、写真を撮ると目に見えて痩せてきて、ややみずぼらしい。中年痩せも考えものだ。

川下の風景
P 2 0 9 ~

川畑 隆

自分の専門を、これまで「児童福祉や教育分野等における対人援助」としてきましたが、いまは「子ども家庭支援に向けた事例検討」とするほうがピタッとくるほど、検討の場に参加させてもらっています。その事例に接する時に、私の頭の中によく動員される着眼点をできるだけ書き出した本を、出版する予定です。

そしてその本に付章として、ここまで連載した『私の頭の中のまだエンピツ①～⑥』と実は『⑦～⑩』もすでに書いていて、それも含めて収録しました。ですから、このマガジンへの掲載は今回で終了とします。

出版する予定の本は、『(仮題)子ども家庭支援のマトを探す～事例理解の目のつけどころ』で、「出版予定。出版社未定」として機会あるごとに宣伝しています。

出版が決まらないのです。仲間と一緒に書いた本は結構買っていたのですが、私が一人で書いた本は売れません。馴染みの社の担当者からは売れる努力を問われているところがあるのですが、売れない人の本は「はい、出しますよ」と簡単にいかないのは当然でしょう。「出せません」との結論が出れば、他の一社に打診してそこでもダメなら、アマゾンからの自費出版の手で行こうと目論んでいます。これは『児童相談所から教わった』で成功体験がありますからね(成功体験というのは「売れた」ということではなく「出せた」という経験です)。本の内容からして、そういう本をよく出している出版社から出したいのですが、アマゾンの準備が要るかもしれません。

いずれにしろ、きれいな服を着た我が子を早く目にしたいものです。

連載を読んでいただいたみなさん、ありがとうございました。

私の頭の中のまだエンピツ
P 1 9 4 ~

浅田 英輔

今年は雪がすごかった。津軽衆も途方にくれるレベル。夏は1時間ちょっとで行ける通勤が、朝6時に出発したのついでに10時過ぎだったりしました。電車は1週

間くらい動かなかった。ちょっと遅刻しそうなら焦るのですが、そこまでいくともう逆に「さーて何時につくのかなー？」と楽しくなってきましたよね。春になると絶対になくなるものに対して、みんなでお金も時間もかけてこっちからあっちに運んで、文句ついたりトラブルになったり。なんとかならないかな――。

臨床のきれはし

P 94 ~

松村 奈奈子

ここ数年、重要伝統的建造物群保存地区（よく伝健地区って言います）を訪ねるのが好きです。伝健地区は文化庁が、城下町や宿場町、門前町など歴史的な集落・街並みの保存のために選定しています。先日は徳島県的美馬市の脇町に。徳島名産の藍で金を成した豪商の並ぶ街並みは、立派な“うだつ”もあって、いい感じでした。



最近伝健地区にオシャレなカフェや古民家宿泊施設もある所が増えて、今回も古民家に泊まりました。すだちジュースを飲みながら、小さな店先で地元のお婆ちゃんが焼いていた田楽を食べました。いやあ、お散歩、面白かったです。伝健地区はひとつひとつにその町の歴史があって、歴史や名物を感じながらの街歩きが、とっても楽しいです。

神科医の思うこと

P 134 ~

村本 邦子

白内障の手術をした結果、近くも遠くもすごくよく眼が見えるようになった。眼鏡もコンタクトも不要だ。ただし不思議な現象がふたつ。ひとつは夜の光が同心円状に美しくロマンチックに拡がって見えること。こ

れは悪くない。もうひとつは人の眼鏡のレンズが黄色がかって見えること。最初は、UV カットとか液晶とかから眼を保護するための特殊な加工が新たに開発されて、最近の流行りなのかなと思っていた。でも、よく見ると世の中の人（海外からの観光客含む）の眼鏡が全部そうで、さすがに世界中の人がいっぺんに眼鏡を新しくするなんてことあるはずがないと気づいたのは2週間経ってからだった。とくに生活に支障はないが、黄色信号による条件付けのためなのか、微かに不穏な気分になるので快適ではない。眼医者さんに聞くと、「そういう人は初めて聞いた。理由はわからないが、見え方は変わるから」とのこと。だいたい1ヶ月で視力安定というが、結局今もそのままである。色は移ろいやすいものだ。十メートルも海に潜ると、あつというまに魚の色はなくなっていく。もしかすると世の中の人みな違う色の世界を見て生きているのかもしれない。シンボリックにもである。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P 107 ~

國友 万裕

今日、立命館から春からの書類が届きました。もう一生、立命館で教えることはないと思っていたのに、半年間のピンチヒッターとはいえ、縁ができて教えることになったとは因果なものを感じます。

本当に大学の頃は辛かった。

今でも思い出すのは卒業して、他の大学の院に入った後、西院の駅の近くでうどんを食べた思い出。連載中にも書いたとおり、卒業の時に最悪の出来事が起きて、他の大学に移った僕は自分の運命を恨んでいました。当時田村泰次郎の『肉体の門』という小説を文庫本で読んで、娼婦たちが、何もかもを憎むことで自分を支えているという部分に痛く共感したのを覚えています。どん底で、自我をなくして、どうにかひたすら生きていました。

実は、大学時代4年間お世話になった下宿の大家さん、とても良心的ないい人だったので、大家さんたちには他の大学の院に移ることは言わず、九州に帰るんですと告げて右京区の大学に移ったんです。

大学時代を消化できない、これからの展望も見えない、まさにどん底。そんな時に自分とは全く関係のない小説のちょっとしたフレーズが心に突き刺さることありますよね。あの時食べたうどんは美味しかった。暗黒の中での微かな幸せでした。

でも、少しずつ、暗黒から光が見えてきて、そしてその翌年にはアメリカ留学のチャンスを掴んだのでした。人間って、何が幸いするかわかったものじゃありません。

さあ、あれから約40年。今回は新たな気持ちで、半年間教えたいと思います。何か嬉しい出会いがありますように。

スポーツおじいさんになりたい！

P 79 ~

三浦 恵子

職場から公共交通機関を使って帰る際、駅構内で男性の大きな声が響き渡りました。

構内での行き来をめぐっての口論のようですが、このままヒートアップするのではないかという懸念もあり、改札を出る際、駅係員の方に手短かに状況をお伝えすることにしました。

改札口ですすでに駅員さんに状況を伝えていた方もおられ、駅係員さんのとりなしにより、口論はほどなく収束し、世界に平和が訪れたのでした。

ただ、状況を見守りながら少しお話をしている際に、極私的问题が発生。

先に改札で報告された方「なんでこんなところで喧嘩なんてするのかしら(嘆)」

私「ほんまですわ。タイマン張るんやったら、放課後体育館の裏に来んかいワレ、やろ」

先に改札で報告された方「タイマンって…(なんかこの人も怖い)」

タイマンとかまず日常会話で使いませんし、体育館の裏も、いつの時代の漫画や、という感じです。次号の執筆者短信ではもっと穏やかな御報告ができるよう、精進いたします。

現代社会を「関係性」という観点から考える

P180

坂口 伊都

正月に娘が帰ってきた時、神社でおみくじをひきました。夫がひいたのは「半凶」。年の初めに「凶」が入っているのか。そして、半凶って何？初めて聞いた。

そのは「半分の凶」が、夫ではなく私に降りかかりました。本当に一瞬の出来事だったのですが、重たい折り畳み椅子に人差し指を挟んでしまいました。血が滴りおちて止まらなくなりました。それも家族療法ワークショップの講師中をしている最中に。何重にも巻いた絆創膏で私の人差し指は曲がらず、心臓より上に置いておかないとドクドクします。その状態でワークをやり切りました。私、頑張った。

受診をすると、爪がつぶれて下の肉が盛り上がっていると言われました。3週続けて通院しました。私のおみくじは「吉」だったのですが、半凶は私だったかも。爪は今も欠けています。爪には保湿がいいそうなので、ハンドクリームをせっせと塗っています。利き手の人差し指が欠けていると不便です。早く伸びないかなあ。

療育手帳の向こう側 P102~

河岸 由里子

【いよいよ！】この3月で19年勤めた某市の心理士兼アドバイザーを退職する。非常勤で週2回、往復130kmあまりを雨だろが吹雪だろうが、道が凍ってようが通っていた。その間にメンバーは次々入れ替わり、化石的存在になっている。60で辞めようと思ったがならず、65で辞めようと思ったがこれも引き止められ、結局71まで働くことになってしまった。今回システムが変わる事になり、ちょうどよい機会だからと延長をお断りした。また、幾つかの市でやっていた母子保健のアドバイザーの仕事や子ども子育て会議の委員、スクールカウンセラーの仕事も殆ど辞める。まだいくつか残っている仕事はあるが、おそらく大きく収入は減ることになると思う。それでも、人生72年とやってきたので72になる今年で終止符を打つのは想定内だし、特に心残りもない。これからの人生は私にとっておまけである。それが数年なのか数十年なのかわからない。幸い健康である。冬の運転を考えて、車なるべく乗らない生活をしながら、東京と千

歳を行ったり来たりしようと思っている。まだ「かかし」の患者さんがいるので、「かかし」の対面を終了するのは来年と思っている。「かかし」をオープンして今年で22年になる。正規の料金で受けている方が多くないので、全く儲からない。それでも1100人ほどの方の相談を受けてきた。その他の場所でのカウンセリングも含めると、最近は月平均60件くらいの相談を受けている。となると年間720件か。述べだが随分沢山相談を受けて来たなど改めて思う。来年以降オンラインだけでやっていこうと思っているがどうなることか…。そして主に東京で、歩くことを主体にして、体調を維持しつつ、好きなことをしながら、でもまだ少しだけ働いて、のんびり過ごしたいと思う。

公認心理師・臨床心理士・北海道

ああ、相談業務
P67~
先人の知恵から
P151~

中村 正

毎年3月、長く学校にいる者としては卒業と入学の季節なので感慨深い。といっても大学生や大学院生なのでその感慨は冷静である。冷静になった理由の今年の理由は生成AIとの格闘だった。卒論や最終レポートと生成AIの関係は教育関係者がかなり頭を痛めている問題のひとつだ。なかでも卒業論文の指導が難儀だ。使うなど禁止できるものではないし、またすべきではない。どう付き合うか。これを指導しなければならぬ。2年間かけて付き合ってきた学部演習の学生たち。こんな工夫をした。まずは卒論として書き上げた第一草稿がある。これをAIチェックにかける。チェッカーもAIだ。無料で質のよいものがある。学生自身にさせる。AI的な表現の出現率が瞬時にでくる。それをスクショで提出させる。この時点で50%を下回っていた場合は盗作ではないと判断する。90%の学生がいた。最終的には、この数字を30%程度に下げていくことを目標にする。できれば同じAIチェッカーを使う。数字を下げていくことに指導力がでる。何度か繰り返し独自の考えを書き込むことでうまくいくと学生も嬉しくなり、筆が進む。独自の考えは難しくない。社会病理学ゼミ

なので、どうしてこの主題に取り組むことにしたのかという動機を書くとは比率は下がる。考察の結果についても自分の言葉で結論を書き、これからの生活に生かしていく事項を書くとは比率はさがる。調査した過程でインタビューした相手の言葉をデータとして書くとは比率は下がる。こうしたことをしなければならないことになるのだが、これはこれで双方が楽しい。つきあい方次第だということか。恋文をAIに書かせている学生がいたが…。これはさてどうしたものか。そもそもラブレターとかは死語だし、恋文は古文のなかの言葉になっているのだが。

臨床社会学の方法 P21~

中島 弘美

京都の伏見にある城南宮の「しだれ梅と椿まつり」に出かけてきた。

城南宮といえば、かなり昔の話、私が大学生の頃、その近くの特別養護老人ホームでアルバイトをさせていただいた。当時、高齢者福祉にも関心を持っていて、白紙状態から指導していただいた。職員さんや施設の雰囲気がとてもよかった。一階建てだった特養は四階建ての総合福祉施設になっていた。あのころ、経験すること、ひとつひとつが新鮮だったなあ、感謝の思いと、懐かしい気持ちが湧いてきた。

学生のころは、梅よりも桜の方をよく観ていたような気がする。今は梅を見る機会の方が多い。城南宮の庭では、白色や淡いピンクの枝垂れ梅が咲き、薄い色や濃い紅色の椿は種類も豊富で、苔の色と合わせるととても春らしい美しい景色だった。



ただ、椿餅がすでに売り切れていたのがなんとも残念。最古の餅菓子のひとつと言われているらしい。つぎはぜひともいただきたい。

カウンセリングのお作法 P35~

黒田 長宏

羽田空港のそばの商店街で、「マーサのウーパールーパーしあわせ計画」という、ポップアップストアの活動をはじめました。URL です。

https://note.com/konnankyuujiyo/n/n8f236712bacd?sub_rt=share_sb

ああ結婚

P162

脇野 千恵

昨年、師走に入ろうとしたときのある日、家族が病気になった。予想だになかったことに、別に暮らす家族も含め驚きが隠せなかった。今も入院中で治療に専念している。NHK の「病院ラジオ」が好きだ。お笑いコンビのサンドイッチマンが、実際に病院に一日 だけの出張ラジオ局を開設する番組。病院に入院、通院している患者や家族をゲストとして 招き、話を聞き出して行く。彼らのインタビューが実に自然で、ゲストは苦しい複雑な心の うちを赤裸々に語っていく。そこには家族との関り、家族への思い、感謝の言葉があふれ出す。話の中には、ドクターや看護師とのエピソードも出てくる。最後に、日ごろ伝えられない家族への思いをリクエスト曲に託して、ゲストとともに聞く。家族の日々は人それぞれ。様々な出来事の中には、病気も入ってくる。外から見れば「大変やね」と言われそうな出来事も、今落ち着いて構えていられるのは、家族理解のおかげかもしれない。

こころ日記「ぼちぼち」

P 2 1 1 ~

岡崎 正明

最近、いろんなところで「問うこと」や「続けること」の大切さに会う気がする。勝手にトレンドだと感じている。この2つは私の中ではつながっていて、「問う」ことを大切にすると、結論が簡単に出ないため継続審議状態、つまり「続ける」ことになる。答えを急がず、思索や対話や関係性を続けていくこと。これがいろんなジャンルの潮流にある気がしている。

最近ハマったマンガ『チ。』では、常識を疑い問うこと、世間の空気や価値観からはタブーとされることでも、人は知りたい欲

求を捨てられず、信じられる真理を見つけるために問い続けるという、人間の本質の一面を教えられた気がした。また、最近知った「哲学対話」という、身近なことに問いを立てて考えを深めていく手法も、すぐに答えを出さず、「なぜそうなのか?」「どうして私はそう思うのか?」と当たり前を解像度高く見つめ直すことで、本当に自分が何を大切にしたいのかを探し続けていく営みだ。

対人援助領域で話題のオープンダイアローグも、解決ではなく対話を続けること、関わりを続けることを目指すものだし、安全パートナーングもラップアラウンドも、行政や支援者の価値観だけで答えを決めず、相手と共に話し合いを深めながら探し、変化させていくことを良しとしている。私には、これらがどれもつながって見える。

これはきっと、一方的に善悪や正解を決め、「取引」と言いながら脅迫や強要で結論を急がす世界政治や、「決断」「責任」といった抽象的な言葉だけで権力が走り出そうとしているこの国の現在への揺り戻しなのではないだろうか?と勝手に思った。ついこのあいだまで「持続可能性」なんて言葉が叫ばれていたのに。

もちろん、批判ばかりやきれいごとに見える理想にも課題はある。けれど、そんなに簡単に切って捨てていいのか。消費税を下げるのか下げないのか、憲法を変えるのか変えないのか。「とにかく踏み出さないよりは、やる方が前向きな気がする」程度の理由で決めてしまうのだとしたら、それはずいぶん危うくて不遜な態度ではないか。

私たちは間違え、仕組みは複雑で事情は個別的で、あちらを立てればこちらが立たない。自然はそんな人間の都合に関係なく動き、ときに災害ももたらす。だからこそ私たちは、知らないことがあることを前提に、謙虚に、自分たちにプレーキをかけたり、相手と慎重に話し合ったり、どうにもならないことは助け合ったりして、とにかく社会を続けてきた。生命もつまるどころ、続くこと、つなげることが大目標だ。安易な結論でなんとなくスッキリした気になるなんて、幻想だと思う。

役場の対人援助論

P 8 8 ~

千葉 晃央

日本一短い私鉄、「紀州鉄道」に乗りました。和歌山県御坊市での研修を担当するため、京都から御坊市へ移動しました。特急料金が発生しないルートで行くと、JR 大阪駅からは大阪環状線を通る「紀州路快速」があり、環状線から和歌山駅まで運んでくれます。「紀州路快速」は、「こまち」と「はやぶさ」連結の東北新幹線同様、前半は関西空港行き「関空快速」、後ろ半分は「紀州時快速」というややこしさ。JR 和歌山駅からは紀勢本線で JR 御坊駅までというルート。これで 4 時間半ぐらい。一気に行くな「特急くろしお」。京都駅発は 1 日 1 本で夕方発にしかなく、他は JR 新大阪駅発。これで 3 時間強ぐらい。御坊駅到着後は、研修会場に一番近いお宿をキープということで「旅館」の一択。「紀州鉄道」の紀伊御坊駅が最寄り。



「紀州鉄道」は、前回来た時には乗車できず、初乗車。今回は移動ルートにあり、必然。「紀州鉄道」は全線で距離 2.7 キロ、8 分の路線。乗車時も数名の乗客で、住民の足。「紀州鉄道」で有名なのは、御坊駅の次の駅「学門駅」の切符。合格祈願のご利益に！とテレビのニュースによくなっていた。現在、この鉄道自体廃止が近い?というウワサも。使っている車両も信楽鉄道などのものを譲り受けて運用。何年か前に乗った阿蘇山ロープウェイも、小さいころに乗った能勢の妙見の森ケーブルとリフトもなくなった。こうした機関の維持の難しさは顕著。紀州鉄道も旅館もレトロな姿が味のある時間でした。古きよきものを使いながらの 2026 年。昭和レトロブームに万歳。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P 1 7 ~

見野 大介

2月に開催した銭屋ベースソラソウでの個展、最終日に出張料理をしてもらったフレンチのシェフが大学時代の後輩だった。近畿大学文化会陶芸部で彼と出会ってから25年、陶芸と料理という形で一緒に仕事をしたことが部活時代を思い出して感慨深い。

ハチドリの器 P 4

柳 たかを

家庭菜園「おでん大根」と「辛味おろし大根」

数年前から、田舎の妻の実家で大根とジャガイモなど育てようと畑で土と戯れる時間を楽しんでいる。これまで育てたのは大根、ジャガイモ、さつまいも、ニンニク、ほうれん草など、繰り返し栽培したのは大根とジャガイモ、2~3回ニンニクも試したが、ニンニクは栽培用のニンニクの実がシーズンになるとホームセンターで売られているものを手に入れて育てた、

結論、ニンニクはむずかしい、おそらく事前の土作り、植える時期が遅れたかあとのケアが下手だった、期待どおりの大きなニンニクにならなかった。

昨年10月初めに蒔いた2種類の大根、「おでん大根」と「辛味おろし大根」、両方とも初めて育てた品種でした、おでん大根は太くて短い、おでんの出汁で炊くとよく出汁がしみ実も溶けるような柔らかな歯ごたえで美味しい、「辛味おろし大根」は小さくて最初は「なんだこりゃ！」白く長く長い大根のイメージとは全然違う、「辛味おろし大根」からいね」という、緻密な肉質でおろしてお蕎麦の薬味として使う、自分は毎朝納豆におろし大根をからめていただく、おろし大根をからめると納豆の匂いが薄まっていくだけでも食べれる。

今回、「辛味おろし大根」を育ててみようと思ったのは、毎朝の納豆にもっと辛味のかきた薬味大根は合うのではないかと期

待したからでした。



結論、辛味は素晴らしい、ただおろすのに苦労する、腕力が必要、でもこの薬味でいただく納豆やざる蕎麦はいける、しかもスーパーで買ってきたものと違い自分で育てた大根なので無農薬、安心と満足に包まれてます。

如来の祭り P 138~

古川 秀明

島根に住む親戚の子が、自給自足の暮らしぶりを取材され、テレビで紹介されました。彼は現在32歳。幼稚園の頃から知っているの、画面の中で立派に働く姿を見ると、なんだか不思議な気持ちになります。

家の前の畑で野菜や米を育て、猟師の免許を取り、野生のシカやイノシシを狩ってその肉を食べ、鶏を飼って新鮮な卵を得て、さらに養蜂までしてはちみつを採る。お風呂は薪で焚く五右衛門風呂、ごはんは竈(かまど)。手作りのかき餅を作って現金収入にし、自分でピザ窯まで作って仲間を呼んでパーティーを開く。「こんな生き方もあるんだなあ……」と、つい感嘆してしまいます。彼を見ていると、昔のNHKドラマ『大草原の小さな家』に出てくるチャールズ父さんを思い出しました。

この年齢になると、さすがに彼の暮らしを「羨ましい」とは思いませんが、家に引きこもり、ゲームやスマホに依存し、自殺率が世界一高いこの国

の若者たちには、彼の生き方のエッセンスが少しあって、もいいのにな、と感じました。

講演&ライブな日々 P 99~

野中 浩一

来年度から2年間、ベトナムに行くことが決まりました。ということで、次回からは「ベトナム編」がはじまります！（たぶん）

coconollp@gmail.com

島根の中山間地から Work as Life P 227~

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。

昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぼちぼちと出てきました。今年度は生まれて初めて「ゼミ」というものを担当し、ゼミ生といっしょにいろんな活動をさせていただきました。

自分と学びや興味の対象が似ている18~19才の人たちと、いっしょにわいわい話し合いながら、長い時間をかけて色々なものに皆で一緒に会っていく。授業の距離感とも、実習指導の距離感とも違う、なんだか不思議な感じです。

今年は1年生だけのゼミでしたが、いよいよ後輩が入ってくる、ということで、ゼミ生たちはいろんな期待と不安を持って、鼻息荒く待ち構えています。先輩/後輩関係が出来る2年目、さあどんなふうになるのかな。私も期待と不安を持ちつつ、新年度を迎えます。

福祉系対人援助職養成の 現場から P 59~

松岡 園子

混雑を避け、今日は静かな場所でひと息ついてみました。温かいお茶に肩の力が抜け、「こういう日も、まあ悪くないです

ね」と小さく笑えました。

環境を少し変えるだけで、心はふっと軽くなります。誰もが安心して力を抜ける場を支えることも、支援の大切な役割の一つだと感じています。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども

P192～

寺田 弘志

心理療法に治療のダブルバインドという考え方があって、症状を強めましょうという指示を出すことがあります。

接骨院で施術するときも、症状を強めたり、弱めたりを繰り返します。

症状を強めるのは怖いですが、症状を変化させることができなければ、改善させることもできません。

今回も本文では、パラドキシカルストレスの説明をしていきます。

接骨院に心理学を入れて

P169～

篠原 ユキオ

別れの日に

先日、本家の叔母が103歳の誕生日を前に老衰で亡くなった。

大病を患う事は無く穏やかな独居生活を甲子園のマンションで送っていた。

叔母には子どもは無く親戚も少なかったので私の世代だけの家族葬となった。

葬儀場は駅からバスで数分の場所だったがちょうどその道の中ほどに叔母のマンションがあるので30分ほどの道を歩くことにした。

この先そこを訪れる事も無くなるのだと思うとそこまでの風景をゆっくり見とおきたくなったのだ。

春の訪れを感じさせる暖かな日差しの中を歩いて行くと15分ほどで見慣れたレストランの後ろに叔母のマンションが見えてきた。

大きな道路を隔てて部屋が眺められる場所に立ち止まってカーテンが開まったままの部屋のベランダを見ていると弟と部屋を訪れた帰りに横断歩道を渡りながら弟が言った言葉を思い出した。

「このへんでマンションを振り返って手を振

るねん。いつも伯母さん、ベランダに出てこっち見てるからな」

振り返ってみるとその通りこちらを見ている叔母の姿があった。

二人で大きく手を振るとそれに応えて叔母も手を振っていた。

そんな事を思い出していると誰もいないベランダに叔母の姿が浮かんで見えた。



HITOKOMART

P205～

サトウ タツヤ

まあ、とにかく忙しい。時間の経過が遅い！（笑）

大学入試は厳密な執行が命だし、研究は次世代研究大学を目指すケレン味も必要。学術情報は守りが必要だし、ダイバーシティは環境整備に精を出す。

これまでの蓄積やネットワークが活性化しているのありがたい。

帰ってきた対人援助学の縦横無尽

P71～

団 遊

ここ数年、冬場は本気でスキーに取り組んでいる。シニアの大会に出たり、検定取得を目指したり、オフから身体づくりに取り組み、シーズンインを心待ちにしている。かといって、冬場に仕事が減るわけではないので、スキーシーズンは車中泊が当然で、猛烈な働き方とスポーツのコラボレーションとなる。

その行く末が、2月中旬に私の身に降りかかった、鎖骨骨折だった。調子が良くて、調子に乗ってしまった。検定前日、師事しているコーチにビデオ撮影しながら指導を受けている最中に、大転倒してしまったのだ。

起きてしまったことは仕方がないので、手術を受け、チタン製のプレートを鎖骨の代

わりに入れて、リハビリに励む日々だが、一方で、怪我や病気は何かを変えるタイミングだとも言う。そこで、早速自分の棚卸しをした。そして、20代と51歳の今と、まったく変わらぬ仕事スタイルを貫いていることに気が付いた。

悔しい気持ちもあるけれど、ここに無理があると認定し、51歳なりの、より精度の高いワークスタイルを身につけ、来年リベンジを果たす所存です。

アソブロックの実践から考える

会社の倫理学(1)

P32～

山口 洋典

このところ、2月末に発表される結果に戦々恐々としています。科研費と呼ばれる研究助成の採択、不採択が公表されるのです。それまで年度明けに発表されていたものが、2022年度分から前倒して発表されるようになりました。そのため、年度が変わる前に、当面の研究デザインの有り様がわかるようになりました。

2026年度の概ねの種目の科研費については、2月28日が土曜日ということで2月27日に採否が公表されました。今年度、私は代表者で2件、分担者で3件の応募があったのですが、分担者でのプロジェクトが1つ採択されたのみ、でした。これで科研費では4年連続で代表者でのプロジェクトが展開できておらず、研究者としての力量が足りないと感じてしまっています。とはいえ、2026年度は立命館大学の学外研究制度を利用し、京都大学防災研究所の研究員(私学研修員)として七尾市田鶴浜地区で滞在型のフィールドワークを展開して参りますので、現場への貢献と共に諸々の力量の向上に努めて参ります！

PBLの風と土

P163～

鶴野 祐介

先月末、沖縄で子守唄やわらべうたの取材に行ってきました。ゆいレール(モノレール)の車内に、近づく駅毎に別の沖縄童謡が流れることに感心しました。「ジンジン」「ていんさぐぬ花」「耳切り坊主」……。大

阪モノルールもぜひ採用してほしいものです。

うたとかたりの対人援助学 P158～

鶴谷 圭一

私事ですが、昨年12月に65歳になって定年の歳になりましたが、園舎建築の借金もまだまだあって、なかなか引退できそうにありませんし、冬の朝など、起きるのがキツイときもありますが、幼稚園に来ると元気が出るのでなんとかやっています。なんといっても、毎日楽しい刺激がある保育という仕事はやめられませんねー！園長なのでつまらない事務仕事はやらなくちゃいけないため肅々と消化していますが、好きなんですよ。ねえ、保育という仕事は、40年もやっても飽きませんから。

来年度からは国が子育て支援の目玉と掲げた「誰でも通園制度」が始まり、ウチの園も2歳児対象にスタートすることになりました。

僕の穿った見かたでは、乳児の保育料を無償化する自治体が増えてきているけど、働く保護者だけに税金を投入するのはバランスが悪いと、専業主婦層にガス抜きのための施策？なんて思いますが、本当は家庭で育つ子どもたちの周りに同年代の友だちがいないことや、子育てのあれこれを相談する人もいないことから、保育施設につながっていない子育て世帯をコミュニティに仲間入りさせて、子育ての喜びや、子どもの発達をサポートするという目的があるのでしょう。みんなで子育てをしていかなくちゃいけない時代になっているようです。

幼稚園の現場から P55～

竹中 尚文

長くこの対人援助学マガジンに掲載させていただいているが、締切を忘れていたのは初めてだ。私の中で当事者意識がなくなってきたのか、単に老齢による忘れっぽさか。急いで原稿をまとめて送った。ホームレスの聞き取りは、ずいぶんと続けているのでストックの原稿はある。聞き取ったのはいいが、公表の許可をもらえない

ものもそれなりにある。その話は、とっても興味深いのだが公表を拒まれている。それぞれの人生の思いがある。もし、そのような話を聞きたければ、現場に来て欲しい。支援活動を手伝っていただけるとありがたい。私たちの活動は慢性的な人手不足なので、来て下さればありがたい。

◆手伝ってもいいよと思われる方は X の「竹中尚文」@taketakefumi3、[または senkoji@leaf.ocn.ne.jp](mailto:senkoji@leaf.ocn.ne.jp) にご連絡いただきたい。

路上生活者の個人史 P77～

山下 桂永子

今年は年明けから1月にマレーシア、博多、軽井沢、草津温泉と旅行をしました。どこも楽しく美味しい旅でした。昨年末からこの1月の旅行に向けてあれこれ忙しかけていたものですから、よく考えたら今年の予定も目標もなんにも決まっていな気が付いたら2月が終わろうとしています。さすがにしばらくおとなしくしようと思っているのですが、いろいろとやらなきゃいけないことで予定が埋め尽くされそうなのは嫌なので、やりたいことの予定も考えていきたい今日この頃です。というわけで今回は時間の使い方について、もっとちゃんと考えないといけないということを書きました。読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターに なるために P147～

迫 共

この2月に博士論文の公聴会を終え、ようやく学位取得の目途がたちました。「保育所保育とケースワークの統合に関する歴史的検討-吉見静江の先駆的貢献を中心として-」というタイトルのものです。副題にあげた吉見静江は、1920年代に米国に留学し、東京の興望館セツルメントの館長職を経て、戦後の厚生省で初代保育課長を務めた人物です。児童福祉法の制定や「保育要領」の編纂に関わった人物ですが、1940年代末に幼稚園とは違う保育所の独自性として、保育にケースワークを取り入れることを提言していました。幼児教育・保育史においても社会事業史におい

ても十分に知られているとは言い難い吉見について、史料をもとに検討しました。まだまだ十分とは言えない内容ですので、更に追及していく必要性を痛感しているところです。

さて前号の短信でもお知らせした通り、今年の3月で広島での任期を終え、次の任地に向かうつもりです。実はこれを書いている時点ではまだ確定していません。ギリギリ…首の皮が繋がったらいいなあ。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P186～

大谷 多加志

2月の7日から16日まで、フランスの児童福祉に関する視察・研修に参加してきました。研修のコーディネーターはマガジンで「フランスのソーシャルワーク」を執筆しておられる安發明子さん、研修に参加したきっかけは同じマガジン執筆者で1月にフランス研修に参加された櫻井育子さんの Facebook の投稿を見かけたことでした。

フランスのさまざまな現場を見学し、そこで働くスタッフの方々のお話が聞けたことはとても貴重な機会でしたが、同じ研修に日本から参加しておられたたくさんのメンバーの方との出会いもとても刺激的で、帰国後も自分の仕事を全うし役割を果たそうという思いを新たにすることができました。



いずれ、今回のフランス研修を通して感じたことや体験したことを、マガジンにもまとめたいなと思っています。

発達検査と対人援助学 P96～

高名 祐美

令和7年度が終わろうとしている。今年度を振り返ると、3年目となったスクールソ

ーシャルワーカー(以下、SSW)の業務が大幅に増大した。支援依頼ケース数が増えた。そして初めての支援依頼があった学校も増えた。依頼が初めての学校への初回訪問は今でもとても緊張する。SSWのことをどう理解し、どんな関わりを求めているのだろうかと不安になる。先生方との初回面談も同様である。

先日、依頼が初めての小学校を訪問した。学校長、対象児童の担任、教育相談担当、特別支援コーディネーター、指導主事、教頭が校長室に参集してきた。言葉を選びながら状況を説明する担任からは、これまでの頑張りや伝わってきた。いろいろやってきたが、事態が好転しないことで専門家の力を借りたいとSSWへ依頼を決めたということだった。依頼を決めてからも、保護者へSSW支援を説明し、同意をもらうことに労力を要したと聴く。説明するなかで担任の感情が表出され、その感情を反映し「つらかったですね」と伝えた。先生の硬かった表情がゆるみ、緊張の糸がとけたように感じた。ここからだなと思う瞬間だった。
(「SSWの仕事」:今号は原稿をお休みさせていただきます)

スクールソーシャルワーカーの仕事 休載

水野 スウ

今号はお休みするのですが、選挙の後で思ってること、短信で少し。

最後まで納得いかない突然の選挙でした。結果は言い出した人の圧勝。一両日は、なんでこうなった??と目を白黒させてたけど、やがて、こういうことだったのかなあ、と。

「イメージ」が圧倒的に他を寄せ付けなかった。強くて明るくて前向きで未来に希望が持てるサナちゃんの姿、ひと目、生で見たいと思う人たちが駆けつけて、アイドル推し活さながらの選挙。ポジティブで勢いのある、聞いてると気持ちよくなる勇ましい言葉、かっこいい、女性でここまでできるなんて、とその努力に勇気がわく。それで選挙区違ってもサナちゃん推して自民党に入れた人が多かったのかも。わかりやすく短い言い切り言葉からは、そのぶん抜け落ちるものがたくさんあるのだけど、

そこを突っ込むと、意地悪、と言われてしまいそう。

ただどね、勇ましい言葉にはうんと用心したい、と私は思うのです。選挙中あまり言わなかったけど、高市首相のしたい政策から見えてくるのは、防衛費をもっと増やす、スパイ防止法をつくる、これまで禁じられてきた殺傷能力のある武器を外国に売っていく、などなど。それは日本が戦争に参加できる国にどんどん近づいていくことのように思えます。

戦争はいや、願いは平和、今ある暮らしが明日も未来も続きますように。サナ活した人たちや自民党に入れた人たちの願いと私のそれは、根っこのところでは多分そんなに違わない。でも、自分の国は自分で守る、という時、その守り方がおそらく違うのでしょうか。軍備をふやして相手の脅威になることが国を守ることなのか、それとも話し合いで信頼を重ねていって、経済でも互いに大事にしあい、本物の争いを避けることで国民のいのちを守るのか——お花畑って言われてもね、武器つくって売って、相手を敵視して、軍備で競い合うことが平和につながるって私にはどうしても思えない。戦争を始めたならやめるのがいかに難しいか、この数年間、毎日見せつけられてるだけに、なんとかそれを回避したいと思うのです。

とても大事な数字を知りました。過去150年間の戦争を調べた研究者による分析。互いに対立する二つの国が軍拡競争した場合、戦争になったのは82%、競走しなかった場合で戦争に至ったのは4%だった、と。競わずとも戦争になる場合があると知った上で、競い合えば8割以上が、という事実を多くの人に知らせたいです。

(出典は「戦争を回避する『新しい外交』を切り拓く」の65ページ。(編著:猿田佐世、巖谷陽次郎 かもがわ出版)

Michael D.Wallace."Arms Race and Escalation," Journal of Conflict Resolution,23(1),15.)

この選挙をどう受け止めたか、高市さん政治をどう思うか、黙ってないで世間話レベルでしゃべりあおうよ、それ続けようよ、と思います。選挙は結果が出たらそれで終わりじゃない、見続ける責任が私にはあるから。誰に入れた人にとってもそれは同じ、未来への責任という意味で。

きもちは言葉をさがしている 休載

原田 希

息をするたび鼻から肺までが一瞬にして凍るような真冬の厳しさにやられ、2月まるまる風邪が治りませんでした。仕事は休まずがんばりましたが体力の限界が近く、休載します。コロナでもインフルエンザでもなかったけど、悪寒のする高熱で、いちばん近い小さな診療所へ行きました。入口に電話番号の書いた貼り紙があって、熱のある人は電話で症状を伝えたのち、車で待機。防護服を着た看護師さんが車まで来てくれて、問診と簡易検査。結果が出てから病室へ。短時間で先生の診察。その後は処方箋が出るまで車で待機。処方箋は事務所から薬局へFAXしてくれて、薬局の駐車場にいれば、薬剤師さんが車まで薬を届けてくれる。少人数の診療所を守るための対策が万全でした。驚いたのは、医療費も薬代も今日はいいです。熱が下がって元気になってから支払い来てください。と言ってくれたこと。接触を最低限にするための感染予防策だとわかってはいても、弱った私の気持ちがなんだかほっこりしたのです。早く元気になって支払いに行きたいです。

原田牧場Note 休載

高木 久美子

喘息と肺炎の治療で入院中のため、「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ!」の投稿をお休みします。

前号からのこの3ヶ月は、意識障害との診断を受けている当事者の方々との意思疎通の取り組みの中で際立って印象的な出来事がたくさんあり、「自分の体験をみんなに知ってほしい。それが誰かの役に立ったら」と、皆さんから預かっていたエピソードがたくさんありました。

また、当事者ご家族から「マガジンを毎回とても楽しみにしています」と言っていたく機会が増え、張り切っていた矢先のことだったので、本当に残念で申し訳なく、体の辛さも相まって泣きました。

そのように待っていてくださる方もいる中で、また、当事者の皆さんとの継続する取り組みの中で信頼関係が深まるごとに、皆さんの語る言葉はより幅広く、深く、軽々と世の中の思い込みや絶望を超えてゆき…。個別のエピソードは都度書き留めておくようにしているのですが、その中からどれを紹介するか、それらをまとめていく過程でそこから何に気づき、次に繋げていくかという検証や考察にたくさんの時間がかかるということを、これまで甘く見ていました。

今度こそ、次号に向け早めに執筆の準備をして、3ヶ月かけて原稿を書きます。見捨てずに待っていてください。

ちなみに次号の予告になりますが、今号で使おうと思っていた見出しを一部ご紹介します：

テーマ「愛は勝つ」

- ・前号の A 子さんのお母さんとお嫁さん
- ・怖いからこそ。2024 年のあるご家族とのリハビリから始まった。誕生！「ご一緒りハ」
- ・ここだったのね(痰の巣窟)
- ・悲鳴を上げていた心臓が
- ・成長したなあ
- ・これは私たちの問題
- ・ヨミトリ君最前線
- ・生まれた壮大な夢

あー、早く皆さんに読んでいただきたかったな。

というわけで、ここからは、入院中の私の学びについてお届けします。

なんとなく風邪気味だったのをこじらせてしまったらしく、起き上がれない日が二日続いた後、突然息ができなくなって急いで家族に車で送ってもらい救急外来にかかったところ喘息の大発作で即入院でした。

今まで経験してきた喘息の大きい発作と始まりの感じが違ったので、風邪の息苦しきなのか喘息の発作で息ができないのか判断に迷っていたのがまずだめでした。「救急車を呼んで来てほしいレベルでしたよ。危なかった」と救急医の先生からお叱りを受けつつ、いろいろ検査をして病室へ。意識はありました。喘息と肺炎の診断でストレッチャーで運ばれる途中、病院の廊下の壁の大きな鏡に一瞬映った私の顔は真っ白でした。

ベッドに移り、酸素マスクと、右手にステロイドと抗生剤の点滴と、左手に酸素の取込み量を計る機器。チューブやケーブルが一杯です。

症状の一番ひどかった入院当日の、夜から翌日の朝にかけて計 3 回の痰の吸引をやりました。初めての体験でした。痰を取っていただいて楽になれるはずなのに、吸痰のチューブが挿入されている間は息ができず、すごく苦しくてグエーッと何度もうめきながら、嘔吐きながら、でも同時に、「そうか、これか。当事者のみんなが言っていたの、こういうことか。チューブをここまで入れるのか。苦しい。いつまで続くの。苦しい」

そして粘膜にチューブの先のエッジが当たる感覚。うめきながら、体感に没頭している自分を認識しました。

当事者の人たちが「すごく苦しいけど吸引をしてもらおうと一時楽になります」といつも言われているのはこのことだったのかと、みんなの顔が浮かびました。

施設での指筆談の対話支援中に、「苦しいので痰を取ってほしいから呼んで来てください」と言われて呼びに行ったらすぐ来てくれて吸引をしていただければよいけれど、「今すぐ行けないけど、あとどのぐらいで行きます」と説明してくれたり、「吸痰の間隔が短いとチューブが通る粘膜に負担があるからもう少し我慢できるかな」と回答をもらったり。

すぐ取ってもらえればベストですが、すぐに吸引がなされなくても、何かご本人が納得するそういう対応に繋がった時は、ちょっとは役に立ててよかったと思ったりはするのですが、「高木さん、ありがとう」と当事者の人がわざわざ言うくださると、そんな些細なことでお礼なんて言わなくていいのと思うのです。でも「伝えてくれてありがとう。高木さんがいてくれてよかった」と、やっぱり言ってくれる、そのことの意味が、今回確かにわかったような気がしました。

投薬にあたり説明のあったステロイドの副作用の下痢や不眠は私にも当てはまり、また肺の炎症により食事を取ると後はしばらく息が上がりボーッとしたり。

間でバイタルチェック、診察、検査、吸入薬の吸引や、栄養士さんが来たり、薬

剤師さんが来てくれたり。栄養士さんは昼食時に来られて私が食べるのを見ながら、おかずをもう少し小さくカットして出しますとアイデアを。咀嚼時の呼吸の負担を減らすためだそうです。すごく手厚いです。

そして、理学療法士の先生が喘息の患者用の呼吸法を教えに来てくださいました。正に目から鱗。驚天動地。理学療法士の先生は神でした。

この続きを読みたい方は、6 月発行のマガジン 65 号で真っ先に「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！」を開いてくださいね！

体調はおかげさまで順調に回復中です。早く良くなって、みんなとの意思疎通の取り組みを再開して、当事者・ご家族の笑顔が更に増えるように、一緒に進んでゆきたいと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！あなたがわかっていること 伝えたい。情報を必要としている方、意思を表出しているのにそれがまだ伝わらないあなたの大切な方に、指筆談ヨミトリとヨミトリ君が届きますように。

ご一緒しましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

**ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
休載**